葛飾柴又「道路」はつらいよ、景観守る難しさ

点照

#谷 隆徳 #東京 #編集委員

2022/8/24 2:00 [有料会員限定]

参道と交差する柴又街道を広げる事業が始まる

人が自然と関わりながら生業を営み、長い年月をかけて生み出したその土地ならではの景観。それが「風景の国宝」といわれる「重要文化的景観」だ。2022年3月現在で全国に71件あるが、国が首都圏で唯一、選定しているのが東京の葛飾柴又である。

9日、葛飾区で料亭「川甚」跡地の活用方法を探る検討会が開かれた。既存の建物を使って地場産品の情報を発信し、柴又や川甚の歴史を紹介したり、伝統工芸を体験したりするコーナーを設ける方向性が決まった。「人々が守ってきた歴史を大事にすると同時に、新しいものを生み出す施設にしたい」と区の中島恵美子観光課長は話す。

川甚は江戸時代から続く川魚料理の老舗で、夏目漱石らの小説や映画「男はつらいよ」にも登場する。知る人ぞ知る名店だが、新型コロナウイルスによる顧客の減少で、21年1月末に閉店した。

矢切の渡しもある江戸川を一望できる立地だ。「大規模マンションができれば景観を損なう」と、区は約12億円で3400平方メートル程度の跡地を取得した。敷地内にはイベント広場なども設ける予定で、24年度に建物の改修を始める。

区による取得は英断といえるが、景観を守るのは容易ではない。重要文化的景観に選定された18年に、区は帝釈天や参道の店舗、旧家など計85件を「重要な構成要素」に指定した。所有者も同意していたはずだが、農家のたたずまいを残す旧家など2件がその後建て替えられてしまった。文化財ではないので、止める手立てはないのだ。

柴又の象徴である帝釈天

参道と交差する都道・柴又街道を広げる事業も動き出している。歩道も含めた道路幅を現在の11メートルから15メートルに広げて防災機能を高めるのが目的で、道路に面する店舗は建物を丸々移動させるか、建て直すしかない。角地の4店のうち、すでに閉店している店については「区が買い取れないか交渉中」（生涯学習課）というが、周囲の雰囲気が大きく変わる懸念は拭えない。

この事業が都市計画決定されたのは終戦直後の1947年。地元では不満がくすぶるが、区は容認している。景観は大事だが、防災も無視できないということだろう。

昔ながらの風景が残るということは古い建物が多い裏返しだ。区は景観に配慮した修繕を助成する制度をこれからつくるという。柴又の行く末を、寅さんも草葉の陰から心配しているかもしれない。（編集委員　谷隆徳）=おわり